

令和 6 年 9 月 23 日

## 徳川記念財団所蔵資料の文化財的価値について

浜松市文化顧問 磯田道史

公益財団法人徳川記念財団（法人番号 2011005003373）より、浜松市に所蔵資料の目録・一覧表が提出された。浜松市では、令和 5 年 3 月 24 日、浜松市長が「財団所蔵品を中心とした展示収蔵施設とする方針を発表」し、「徳川家ゆかりの資料展示収蔵施設整備検討委員会」を設け、展示収蔵施設の整備コンセプトを確立し、計画の具体化をすすめている。この展示収蔵施設の建設にあたって、徳川記念財団（以下、徳川宗家とも記す）の所蔵資料の文化財的価値と特質を明確にしておく必要がある。浜松市文化顧問として、この資料の特質を説明し、その文化財的価値についての評価を以下に記載する。

### 記

#### ○資料の概要

徳川記念財団の資料は、徳川家康の嫡系子孫の家系・徳川宗家（旧将軍家・旧公爵家）に伝えられた総数 2 万点余の巨大な資料群である。この家は松平家として三河地方に興った。戦国末期の家康の代に松平を改めて徳川の家名を名乗り、岡崎城を経て、浜松城を拠点として勃興し、駿府・江戸と居城を移し、江戸幕府を開いた。以後、子孫が「内大臣→太政大臣、正二位→正一位、征夷大將軍、源氏長者、淳和奨学両院別当、兼右近衛大将、右馬寮御監」などを世襲し、17 世紀から慶応 3～4（1867～8）年の王政復古・明治維新まで、実質的な中央政権として日本全国を支配下に置いていた。維新後は公爵家として貴族院議長などの要職も旧憲法下でつとめた。その徳川宗家が持ち伝えてきた美術品や歴史資料の文化財的・資料的価値はかけがえがなく著しく高い。また、浜松ゆかりの戦国大名家でもあり、岡崎と静岡（駿府）の中間点にあたる浜松市で適切な規模の収蔵庫を整備したうえで一括して保存管理し、展示し、文化観光および学術研究に資する意義は浜松市域の活性化の観点からも意義が大きい。

#### ○資料の特徴

徳川宗家の所蔵資料の特徴について述べたい。この資料群は「刀剣・茶道具、絵画、書跡、古文書、工芸（品）、染色（衣装等）、雛道具、人形類、印章、賞状類、長持（収納箱）、古写真、寛永寺（墓地）出土資料」および「（徳川）宗家資料」など多岐にわたる。徳川将軍家・徳川公爵家に残された近世から近代にかけての歴史資料や日記類・和漢の典籍も含まれている。文字資料だけでなく、武器・書画・工芸品から家具・調度・衣装まで幅広く、古写真・古文書類には専門研究者にとっても未知のものが多く、未公刊の資料がほとんどである。今後の研究の進展によっては、新たな徳川時代の歴史像を生み出しうるほどの資料である。また美術品のジャンルが幅広く、質量ともに傑出している点からして、これを展示する場合、展示企画のテーマに事欠かず、徳川将軍家の所蔵品という話題性もあって、観覧者をひきつける力が大きく、満足度の高い展示となりうる。

刀剣は家康の愛刀と伝わる「来国光（重要美術品）」を含み、茶道具は重要文化財の初花の肩衝茶入がある。絵画は、歴代将軍の肖像画だけではない。歴代将軍のなかには絵筆をとった将軍

も多く、三代家光など将軍自筆の絵画が数多く含まれている。もちろん狩野派や四条円山派・土佐派などの名画もある。古文書には、家康自筆の書状、朱印状など家康の発給文書も多い。さらには、豊臣秀吉朱印状、柴田勝家書状、細川忠興・黒田長政・藤堂高虎書状などの戦国から近世初期の有名武将の資料も含まれている。関ヶ原合戦から大坂冬の陣にいたる政治過程での関連資料や、教科書や一般書籍等で知られている徳川将軍の肖像画、戦国武将の自筆物は魅力的な展示を生み出すに違いない。徳川宗家文書には「将軍御意之振」といって、将軍への拝謁が行われる際の将軍の言葉かけを振り付けた史料が多数存在している点も、学術的に注目すべきである。将軍の日用品が多く、将軍や大奥の私生活を「見える化」できる点にも価値がある。江戸後期の未公開資料も多い。吉宗時代のあと田沼意次・松平定信が筆頭老中をつとめた天明・安永・寛政期以降の幕政資料がかなり含まれている。幕末の異国船来航や開港、和宮降嫁から慶応年間の王政復古・維新に至る幕府内部の未公開史料も多く、当時の歴史の裏面を解明する重要な手掛かりとなる。また駿府（静岡）に徳川宗家に移された際の静岡県知事の辞令などもある。初期の静岡県政の資料が数多くみられ、静岡県内で収蔵されれば、地域史の研究や展示も進められよう。また近代以後は、徳川宗家が公爵家となり貴族院議長にもなる。明治以降の徳川宗家の家政関連の日記や会計帳簿・書簡がよく残っている。これらは日本近代史上の重要資料である。展示に向けた古地図も江戸城の図面などが散見される。書跡は家康はじめ歴代将軍や天皇・皇族・摂関家など公家の自筆物が数多く保存されている。大奥の夫人やその縁者が書いた大量の和歌短冊もある。工芸は将軍・公爵家の調度品であった蒔絵作品など漆器の優品が大量にある。また金工は銀細工の置物なども多くあり、江戸切子・薩摩切子やギヤマン、陶磁器では希少な鍋島焼の優品が含まれる。衣裳類では、徳川家達（田安亀之助）の着衣が保存されている。さらには高位の女性関連の遺品がよく残されている。和宮の人形や文具・婚礼調度、天璋院所用の道具などである。とくに人形類は大量にあり、御所人形から犬の毛植人形まで多様である。印章は幕末期に各国との外交で日本の国書に押された銀印「経文緯武」の現物があり、駿河藩印、天璋院や徳川家達の印がある。また古写真が5742点ある点も貴重である。幕末の鶏卵写真もあり、徳川家が築地に建設した西洋式ホテル、近代以降の公爵家の生活や天皇・皇族方を撮影したものなど、未公開の貴重な写真が含まれている。また徳川家関連の神社仏閣や諸外国・日本各地を撮影した古写真が大量のアルバムにまとめられており、近代化する日本を記録した貴重な画像資料となっている。

## ○資料の価値

徳川記念財団の所蔵資料は、かつての日本の統治主体の大規模な資料群であり、最高の美術品と一級資料の宝庫である。その文化財的価値の高さは、他に類例がないほどのものである。浜松市は収蔵庫の必要規模を軽視せず、専門職員の科学的知識のもとに管理し、わかりやすい展示をし、教育・観光に活用するべきである。また、未知・未公開・学術的にも未発表の資料が多い。適切な保存をはかるためにも、この資料群は展示だけでなく、適切な学術研究・公開がなされる体制整備も、財団からこの資料群を託された浜松市の責任となるのは言うまでもない。以上。